

■就職内定状況について

9月16日(火)に解禁となった就職希望者の採用試験ですが、自衛隊などの公務員試験組を除いて、一般企業を希望している生徒はほぼ内定を得ている状況で好調と言えます。内定している多くの生徒諸君は、時間をかけて担任の先生や進路指導部の教員などに面接練習をしてもらい対策を練っていました。



これまでも本紙でお伝えしていますが、地元企業を志望する場合、やはり一番重要になってくるのが面接で、「志望動機」や「どんな高校生活を送ってきたか」「どんな社員を目指し、志望企業にどのように貢献していきたいか」といったことを熱意を込めて伝えることが大事になります。1・2年生のみなさんで就職を希望している人はその点を自覚しておきましょう。もちろん、「学力」がまったく問われないわけではありません。就職対策の問題集などを活用して、漢字や計算など、常識程度の学力は身につけておくようにしましょう。

■推薦入試に向けて

大学や短大、専門学校希望者については、9月～10月にかけて総合型入試が実施され、おもに11月を中心に指定校制や公募制などの推薦入試が行われます。推薦会議で推薦入試受験が校長先生から認められた生徒は、少しずつ受験に向けて準備を進めて



きていることと思います。推薦入試の場合には総合型と異なり、「評定平均値」が問われることになります。指定校制の場合には各校で面接試験が課され、小論文などの試験は課されない場合が多いですが、公募制の場合には、評定平均値以外にも小論文など何らかの学力をみられるケースがあるかと思われます。入試直前まで油断することなく準備を進めていきましょう。

大学によっては、指定校制でも事前に課題(小論文など)を提出して、面接試験で内容について問われることもあるかと思います。筆者が過去に指導した生徒の中では、出願書類とともにあらかじめ課題を提出して、受験当日にその内容についての質疑が行われる大学がありました。かなり入念に事前に提出した書類内容についての質疑応答の練習を行い、その生徒は無事に入試をクリアしました。指定校制については、基本的に不合格になることはないものと考えていますが、大学によっては一定程度の学力をみるための入試を課し、厳しくみているケースもあるようです。受験を控えている人は、事前準備をしっかり行ったうえで臨むようにしましょう。

■ 3年生の合格体験記

3年生の進路活動ですが、大学や専門学校を総合型入試で受験した人は結果待ちというケースも多いかと思います。就職希望者については、一般企業の可否はおおむね結果が出ており、残すは公務員試験の発表を待っているという段階かと思います。今回は就職希望者で内定を得た上遠野祐也君（3年5組）、伊藤光さん（3年1組）、石垣太規君（3年2組）の3名に「合格体験記」を書いてもらいました。1・2年生のみなさんはぜひ参考にしてみてください。

【合格体験記】 上遠野祐也君（3年5組）
日本製紙株式会社勿来工場内定

私が日本製紙株式会社を志望した理由は、職場見学をした際に職場の雰囲気がとても良く、社員の方がとても優しく接してくださったので印象が良かったからです。また、この企業の製品が身近なものとして広く使われており、その生産に携われることにやりがいを感じました。日本製紙株式会社は環境問題にとっても配慮していて、社会貢献度の高い企業であることも私が志望した大きな理由でもあります。



私が入社試験を突破するために取り組んだことは、SCOA（総合適性検査）の勉強と面接練習です。特に力を入れたのは面接です。高卒での入社になるので、学力よりも受け答えなどの方が大事だと思い力を入れました。1人の先生だけでなく4人ほどの先生と練習することで対応力や緊張に慣れることを意識して練習するように心がけました。

試験当日は面接官が7人もいてとても驚きましたが、緊張せずに大きな声で話すことができました。SCOAの試験はあまり手ごたえがありませんでしたが、面接は何とか対応できたのではないかと感じました。また、会社の門をくぐってからは社員の方々に対して笑顔であいさつすることを意識しました。

結果は内定でした。力を入れていた面接ではトップの評価をいただきましたが、SCOAは中程度の成績で悔いが残る結果でした。SCOAについては入社試験の1週間ほど前から勉強を始めたので準備不足でした。

最後になりますが、4月から働くにあたって、どの部署で働くことになるにしても熱意を持って自分の強みを生かしながら頑張っていきたいと思います。そして、できるだけ早く仕事に慣れて貢献していけるようになりたいです。後輩のみなさん、地元企業の高卒の就職試験では面接が何よりも大事になってくると思いますので、その点を意識して準備するようにしてください。

【合格体験記】 伊藤 光さん（3年1組）
株式会社武蔵野化学研究所内定

私は、武蔵野化学研究所の事務職に内定しました。選考の面接では、たった一度の面接で自分をしっかりと伝えなければいけないということでプレッシャーが大きく、とても緊張していました。私は人前で話すことが苦手で、最初のうちは面接練習でも言葉に詰まってしまうことが多くありました。



母や先生にアドバイスをもらい、それを意識して何度も練習を重ねました。家でも話すことをメモに書き出して整理したりしているうちに少しずつ落ち着いて話せるようになりました。

面接当日はとても緊張しましたが、面接官の方が優しく対応してくださったので、途中から自然と笑顔で話すことができました。「高校生活で頑張ったこと」を聞かれたときは、柔道部で3年間努力してきたことを話しました。厳しい練習の中でもあきらめずに続けた経験を通じて、忍耐力や責任感を身につけたことを伝えました。面接が終わったときは、緊張から解放された安堵感でいっぱいでしたが、「やり切った」と思えるほど全力で臨めたことが嬉しかったです。合格の知らせを聞いたときは、喜びがこみ上げてきました。

4月からは社会人として責任をもち、仕事を丁寧にこなしていけるように努力していきたいです。

【合格体験記】 石垣太規君（3年2組）
東京電力ホールディングス株式会社内定

私は小学校の頃から日々の暮らしに欠かせない電気関連の仕事に携わりたいと考えていました。東京電力ホールディングス株式会社の職場見学に行った際に、社内の雰囲気が良くて、社員の方々が積極的にコミュニケーションを取りながら仕事をしている姿を見て、この会社で仕事がしたいと思うようになりました。



試験内容は、適性検査と筆記試験と面接でした。私は人と話すことが苦手なので面接を中心に対策しました。面接は色々な先生にお願いして練習していただきました。自分で面接ノートを作り、何を質問されても良いように何度も見返しました。その結果、面接本番ではあまり緊張せずに受け答えをすることができました。色々なアピールをするためにも、部活動やボランティア活動に一生懸命取り組むことも大切だと思うので、就職を希望する人は早め早めに行動して少しずつ準備を進めてみてください。

■ ノーベル賞受賞の坂口志文さん・北川進さんの話から

10月6日に今年のノーベル生理学・医学賞に過剰な免疫反応を抑える「制御性T細胞」を発見した大阪大学特任教授の坂口志文さんが選ばれました。2日後の10月8日には、今年のノーベル化学賞に地球温暖化などさまざまな環境問題の解決につながる可能性がある新たな多孔性材料を開発した京都大学特別教授の北川進さんが選ばれました。快挙の連続で、国民としてうれしいニュースが続きました。以下に、読売新聞のコラム「編集手帳」から引用しましたので、一読してみてください。



〈「制御性T細胞」とは、女性か男性か。体内細胞の人知れぬ活躍を描いた『はたらく細胞』（作・清水茜、講談社）の読者なら、迷いなく女性と答えるだろう◆スーツ姿の冷静沈着な女性として描かれたのは、制御性T細胞の任務による。免疫が誤って自分の体を傷つけようとしたとき、ブレーキをかける役割を果たす。ミクロの世界の細胞がなぜそこまでの判断力を持つのか◆この知的で不思議な細胞を発見したのが大阪大特任教授、坂口志文さん（74）である。その功績にノーベル生理学・医学賞が贈られることが決まった◆免疫を抑える細胞は1970年代に盛んに研究された。が、なかなか成果が出ず急速に議論がしぼんだ。「まだそんな研究をしているのか」という空気のなか、坂口さんはあきらめずに20年も研究を続け、人体の内部でひそかに活躍する細胞の発見につなげた。好きな言葉は幸運、鈍重、根気を縮めた「運鈍根」という。気取りのない人生訓に、お人柄がにじみでている◆この細胞を利用し、がん細胞を攻撃する治療が模索されている。未来に救われる人がいれば、運鈍根のおかげである。〉（10月8日付 読売新聞「編集手帳」）

〈クイズを考えてみた。極めて小さな穴が無数に開いていて、人の生活を支えるものは何か◆背中をこするヘチマ、水回りの掃除に便利なスポンジ・・・ではなくて、子供たちが迷わず「MOF（モフ）」と答える時代が来るといい。Mは金属、Oは有機、Fは構造体をそれぞれ英語にしたときの頭文字である。地球温暖化などの問題解決につながる新素材「金属有機構造体」を生んだ北川進京大特別教授にノーベル化学賞が贈られる◆微小な穴は自由に大きさを変えられるため、気体などをえり分けて貯蔵、もしくは分離することができる。その点、スポンジとはスケールが違う◆温室効果ガスの抑制はもちろん、水素やメタンガスを自在に扱えるようになれば、エネルギーを地球を痛めつけないものに転換する期待まである。どこかの国の大統領は温暖化対策を「詐欺だ」とののしり、国際的な協力の枠組みに背を向けている◆目先の利益にとらわれたエゴイズムが幅をきかせる当世、地球を救うかもしれない技術をはぐくんだ日本の科学が誇らしい。北川さんが地道な基礎研究から導いたものは、人類共通の偉大な利益だろう。〉（10月10日付 読売新聞「編集手帳」）

本稿で紹介した坂口さんも北川さんも京都大学の卒業生です。京都大学出身のノーベル賞受賞者はこれで10名となり、東京大学出身受賞者の9名を抜いて国内ではトップに立ったそうです。京都大学には伝統的に自由な学風があり、ユニークな発想で研究に取り組む研究者が多いことがその要因として挙げられるようです。

文責：進路指導部 清水聖